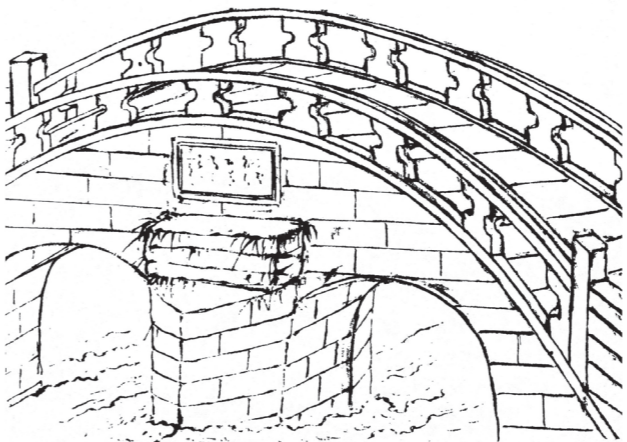


中島川水辺の表情(四) 幼児と金魚と錦鯉

古屋 陸夫

目鏡橋周辺を孫の航大君を連れて散歩する。孫の名前はものものしく大きい、まだ三才前の幼児である。折から長崎燈會の祭もつい先日終わり、いよいよ春本番の暖かさが中島川の水辺にも溢れていた。二人で手をつないで市民会館のすぐ近くの東新橋を渡ろうとしている。世間広しといえども気軽に手をつないでくれるのは、この孫ただ一人、貴重な存在である。危険防止の意味合いからも、二人は必ず手をつなぐことにしているし、幸い航大君もいとわずに、自ら当方に手を差し伸べてくる。危機に対する感覚は誰が教えたわけでもなく、自然に備わっているようである。これは幼児一般にいえることではないか！橋の階段を登る一歩手前で川を覗いて、この児は「金魚がいる」と叫ぶ。

酒屋町 目鏡橋 之圖



長崎古今集覧名勝圖絵より

おや、おやつ！川に金魚がいるのかなと、当方も頭を並べて覗き込む。泳いでいるのは、大型の錦鯉であり、黒色の鮒たちである。老来の私はここではたと、迷った。「あれは金魚じゃない。色つきは錦鯉で、黒は鮒である」と訂正の一言を言うべきか、それともそのままにすべきか？件の幼児をみると最早関心は「金魚」の一言から薄れ、次の関心事を求めている素振りである。まあ！水にいる金魚や鯉、鮒は、もともと親戚のような魚たちである。その内個々に選別をする知恵も機会もあるであろう。無理な教育の必要もあるまい。当方の家庭の水槽で飼っている金魚からの連想で、今回の金魚につながっている根拠はあるわけなのだ。連想することと、想像することは表裏一体の関係。これによしとするかと思己納得した。

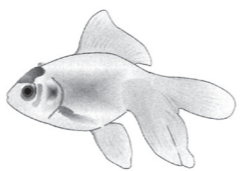
東新橋を手をつなぎ階段を登る。片手は孫の手を、もう一方の手はヒモ付大型の紙袋をさげている。これがいけなかった。階段を上がりきると、なぜか真ん中の手摺りとは別に、左右に鉄柱が二本あった。その一本の鉄柱に紙袋のヒモがひっかかり私は、足元が乱れふらりとした。その反動で前を行く航大君の手を、ぎゅつと当方の側にひっぱる格好となった。お陰で当方は転ぶことはなかったが、いまにも倒れそうな無様な格好、その姿を振り返ってみた孫が「びつくりしたあー、危なかったねエー」と言った。まったく大人と子どもの立場が逆転してしまった。

航大君はまるで歌うようなリズムと抑揚でのたまった。表情は明るく笑みさえ含んでいる様子。老来の当方をいたわるようなからかうような、面白がるような、この場の雰囲気や全を一瞬のうちに察した人のごとし。誠に、幼児といえどもあなどるべからず、であった。

さて、この日より一年が経った。また中島川に連れて行く。川を泳ぐ鯉や鮒たちをみてよもや金魚などというまい。「幼児一年の成長や如何」魚種の選別が出来る知恵を会得したにちがいないと期待する。

昨年と同じく、頭を並べて川面をみる。私の方が緊張する。

航大君いわく「あつ、お魚が泳いでいる」と叫んだのだ。うーん、なんとお魚ね！当方も呟いた。世は正にグローバル化の時代、孫もこの波に洗われているのか？答えは個別ではなく総合的な魚という総称でのグローバルな応えであった。こちらの方がどう判定してよいのか大いに迷う、迷答であった。中島川春の日の一コマでありました。



前回号で私は「少年と鯰とお巡りさん」を書いた。本当に鯰つて中島川に居たの？と疑問の声があったので答えましょう。時は平成22年7月23日、蟬声頻りなる午後3時、眼鏡橋から袋橋に下ってゆく鯰の姿をみた(北川るみ子氏も撮影)、体長70cm程、悠然と泳いでいた。偶然のことながら見た当方も吃驚、あの時の弁当箱にいた鯰かどうか？顔を覚えていないが、成長したらきつとこの大きさ、あの時の鯰だと思つた方が、夢がありそうである。(九州文学同人)

風信

○七月は行事の多い月である。それには梅雨があげ、酷暑の土用を迎え、疫病その他多くの災難にかゝり易い月にむかうので、其の難を避ける為の行事が多いからであるとの説明がある。

○先ず七月の行事は「夏越」の行事に始まり、川祭、半夏の節句、清水観音の千日祭、竜神祭、対馬・飯香浦等の地藏盆、祇園祭に盆の念佛踊、チャンココ、オーモンデ、須古踊等々がある。

○中でも長崎の精霊流しは有名である。但し「長崎の盆」は、昭和二十六年までは七月十三日より始まっていたが昭和二十八年よりは八月十三日より十六日までを盆の日と定めている。

○以来、長崎の八月十六日と言えば長崎光源寺の「産女幽霊」と三宝寺「地獄図」の御開帳の日であり、「送り念佛精進落ち」の日とされている。

○一体「おぼんの語源は古代インド語Ullambanaの音訳であり、直訳すると「逆さまに懸ける」という意味である。それより転じて「苦しんでいる人達を助ける意」になったと説明されている。

○我が国で最初に此の盆供養を施行したのは「日本書記」によれば推古天皇

十四年(六〇六)七月十五日であったと記してある。

○長崎の精霊流しはキリシタンの禁教後、街中に佛寺が建立されるようになった寛永年間(一六二四)以後の事である。

○「ボン」の言葉については、一六〇三年長崎のセミナリヨで編纂された「日ポ辞書」をみるにBon, Urahon, Koro の言葉が集録されているので、長崎氏・大村氏のキリシタン大名支配地以外の地では、以前より「お盆の行事」がおこなわれていた事が知られる。

○先日、日本銅センター(東京)より斎藤久嘉部長外の来訪あり。長崎より唐蘭船により輸出された棹銅の事・銅座町や泉屋の事等質問あり、私達の研究に、おおいに参考になる事が多かった。

○市川森一先生より、島原の乱・天草四郎の秘話を中心にキリスト教の博愛の心を大きく取りあげられた『幻日』を御恵贈いただいた。さすがに先生は諫早の御出身であり、地理・地方史にも詳しく、心ゆたかに読ませて戴いた。(講談社刊・一、七〇〇円)

○今月御寄贈いただいた本

『雄風』第十二号、東京における長崎市立高校同窓会誌で代表編集者藤貞夫氏の後記に「離れた郷里長崎、そして母校、そこに見えてくる感懐が本編の寄稿者の文中にはある」とあった。(F047-386-3598)

○神奈川大学日本常民研究所より『研究論文民具マンスリー』3・4・5号・奈良腰痛地蔵・大分上津江町むかし暮らし・会津農家など(神奈川大学刊)「らく」第12集。「特集」和ごころにふれてみました(イーゾワークス社刊)一、〇五〇円)

○長崎新聞社より、長崎人五〇人の人生記録「ながさき人紀行」を戴く。本の註に「指針教訓に富んだ座右の書となる」と記してあった。(長崎新聞社刊)一四二九円十税)

○コスモス短歌会長崎支部より歌集『海港』73号(久保美洋子編)を拝受。次号の原稿締切は九月十七日。歌題は、「朝」とあった。

○本会事務局より 八月は恒例により各講座は暑中休暇とし、月曜(長崎学)火曜(古文書 水曜(懇話会)金曜(食文化学)の講座休講。但し八月十六日は午後二時より「光源寺幽霊話」は開催。会場光源寺。(自由参加・会費不要)講師・楠住職、越中哲也他)。事務局は盆の十五日(月)以外の月・水・金は開けております。

長崎歴史文化協会研究室
TEL八二二一五四〇
十八銀行公会堂前出張所2F

